

南蛮の風紀行-23 あこがれのヘミングウェイ

ザビエルの故国であるナバラ王国の王都がパンプローナです。この町は7月6日から9日間にわたって行われるわれるサン・フェルミン祭りで世界的に有名ですね。祭りの期間中、毎日闘牛に使う牛を男達が囲い場から闘牛場まで街中を駆けながら追い込むんです。牛を追うというより牛に追われるという方が正確な感じがするほど、スリル満点の光景が繰り広げられ、それを見に世界中から観光客が集まります。

自伝的小説であり、ハードボイルド小説という新しいジャンルの嚆矢でもあった「日はまた昇る」の中のヘミングウェイも、友人たちと一緒にサン・フェルミン祭の期間中のこの町に滞在しています。別にわたしはヘミングウェイの作品の熱烈なファンというわけではありませんが、どうゆうわけかわたしの旅はよく彼の人生の足跡とニアミスしていま



パンプローナはヘミングウェイの出世作「日はまた昇る」の舞台となったところ。左端がカスティージャ広場にあるカフェ・イルーニャでくつろぐヘミングウェイです。

ということでパンプローナでは若かった彼が祭りの間中、仲間たちといつもたむろしていたカフェ「イルーニャ」で、ヘミングウェイと同じポーズでワインを飲みました。もちろん、わたしには何の文学的啓示もありません。ただの飲んだくれの旅人である自分を確認しただけでしたが。

サラサーテというバイオリン奏者にして作曲家も、この町の生まれだったという事をここにきて初めて知りました。カフェ・イルーニャのあるカスティージャ広場から南西に向かって延びる気持

す。

何せわたしはキューバにも行っていません。そこは彼がキューバに恋い焦がれながら、れた時、キューバに一番近い米国領ということで移り住んだ小さな島です。1992年にわたしは家族を連れてその島の彼の住んでいた家に行き、書斎の雰囲気や彼が使っていたタイプライターにも触れています。またそこで代々飼われている6本指のネコたちとも交流を持ちました。



同じカスティージャ広場のカフェ・イルーニャで、同じポーズをとってみました。



イルーニャの入っているビル全景です。イルーニャとはバスク語の「都市」を意味する言葉で、ザビエルの当時のこのナバラ国の王都はそう呼ばれていたそうです。

ちのいい並木道がサラサーテ遊歩道と名づけられていたのです。

チゴインエルワイゼンのイメージから、わたしは彼が東欧の人かと思っていましたが、言われてみればロマ（ジプシー）はイベリア半島にも多いし、バスク人であればこそ、さすらいの民に対する共感もかえって領けます。

サラサーテは19世紀後半に生まれ20世紀初頭まで活躍した人ですが、彼の銅像もまた多くのバスク人と同じく、どこか16世紀に生きたフランシスコ・ザビエルを髣髴とさせてくれます。思いっきり太く両端を少し跳ね上げた髭などは、ザビエルにはなかったのですが、それでもこの町を行き来している、人はいいのにちょっとこわもての男たちと、サラサーテの銅像は、バスク人共通のイメージを持っているようでした。

ザビエルの故国ナバーラはバスク人の国です。バスク人は今でもピレネー山脈を挟んでスペイン・フランス両国にまたがって住んでいて、政治的な国の範疇とは別の独自の文化を保っています。ヘミングウェイがマス釣りのために逗留していたブルゲッテや、ピレネー山脈の山懐にあって今ではフランス領になっているザビエルの父親の出身地サン・ジャン・ピエ・ド・ポールにも、パンプローナ発のローカルバスで行くことができます。その町行きのバスには、バカンスを楽しむ若者たちが乗り込んでいきました。ちょうど「陽はまた昇る」のバスの中のシーンのように。

小説の中の情景は、21世紀の今となっては無理でしょうが、

ヒツジの革でできた水筒に入っているワインを、うまく服を汚さずに口に注入する

飲み方には、実はわたしもずいぶんと憧れたものです。いつかまた、パンプローナを訪れることができるとこのピレネーの山懐深く分け入ってくれるバスに乗ってみたいと思いつつ、現実のわたしはサラゴサ行のバスに乗って、スペイン第2の都市バルセロナに向かいました。



パンプローナの旧市街はイベリア半島の古い町がどこでもそうであるように、城壁に囲まれています。ここは中でも城址公園になっているところですが、函館の五稜郭のように星形としています。大砲の打ち出し口が見えています。ただし、残念ながらこの城はナバーラ国滅亡後に全面的に改修されていて、昔の面影をとどめていません。



ツゴインエルワイゼンを作曲したことで有名なサラサーテの名前の付いた気持ちのいい並木道の途中にある教会広場。ロマ（ジプシー）の悲しみを曲にした彼もまたバスクの出身だったんです。



パンプローナの闘牛場の入口は並木に覆われていましたが、サン・フェルミンの牛追い祭りの日、牛たちが毎日、街中を追われて来て、ここがそのゴールです。